

古河を
ものづくり
の街へ

関口家具



三代続く、創業70年を越える
地元の家屋さん

関口家具さんは、現在95歳で、健在である一代目が旧三和町諸川で修行し、23歳の時に現在の場所に開業。当時は、桐たんすの製造販売や建具などの製作及び修理などを手掛けていましたが、二代目から、時代に合った家具の卸販売や婚礼家具などの販売、家具、建具の製造を通して、地元のお客さんを増やしてきました。家具だけでなく、工場などの配電盤のガラスやブレイカーの取り付け板なども手がけ、現在は三代目代表の隼平（じゅんぺい）さんに受け継がれ、地元で根付いた家具屋さんとして親しまれています。

木と木で組む
ものづくりへのこだわり

三代目の隼平さんは、18歳の時に東京の神田にある建具の専門学校で2年間学び、その後、黄綬褒章受章の建具屋で知られる東京の友國三郎氏のもとで10年間修行しました。そして地元古河に戻り、三代目を継ぎ、5年目となる隼平さんの家具へのこだわりは地域でも知られるようになっています。現在、同じ専門学校を卒業した同年代の清水さんと一人で、修行で培った技術や木の目利きを活かして、「天然木の一枚板テーブル」をフルオー



手描きが紡ぐ
こだわりの技

手描き屋とも



古河市に残る伝統の技
手描きの提灯や木札をつくられている手描き屋ともさんは、古河生まれ。浅草で修行し、現在のお店を15年前にオープンしました。古河市で行われている関東の奇祭「提灯竿もみまつり」の提灯のほとんどをともさんが1人で受注制作しています。描かれる一文字一文字は、ただ書いていただけではなく、職人の覚悟そのもの。ともさんはごく僅かな墨の滲みであっても妥協しない、その信念を貫き続けています。

職人のこだわりが
信頼へとつながる

祭りの夜をやさしく照らす提灯だけではなく神社仏閣に奉納される提灯や持つ人の想いを込めた木札。そこに描かれる文字は、人々の目に触れるだけでなく、その場の空気や記憶を形づくる存在です。ともさんは、提灯と木札を中心に、扇子や表札など全ての文字を筆と墨だけで手描きし、一点、点、真剣勝負で向き合っています。提灯は、灯りを入れた時の文字のじみや輪郭の柔らかさまで計算し、木札は木目や板の反り、墨の染み込み具合を確かめながら描き進めます。その工程で、たとえ一般人には判別できないほど僅かな墨の滲みであっても、自身が「失敗」と感じれば、その作品は決して売られません。すでに完成して

ダーで作成販売しています。
テーブルと言っても、デザインや足の細部にいたるまで、職人の技術が用いられ、釘を使わない【木組み】もそのひとつ。一点物の商品は多くの方が魅了され、注文が絶えません。手間暇をかけて作る家具は作業に時間がかかるため半年待ちになることも多いそうです。

未来の家具職人へと伝えたい

取材した私自身も地元大工として仕事をしておりますが、職人として妥協のない技術をふんだんに取り入れて造る家具はとても魅了されるものがあります。そして、地域を盛り上げるためにも若い職人を育てて古河市をものづくりの街にしたいと熱く語る隼平さんの想いも素晴らしい。いろんな人を巻き込んで成長していく隼平さんのこれからがとても楽しみです。

関口家具

取材
つとむ

株式会社関口家具
住所:古河市下大野1993
営業時間:8:00~17:30
☎0280-92-0318
定休日:土(第2、第4)、日



Instagram@junpeidess

いても迷わず作り直し！結果としてお客様を待たせてしまうことがあっても最高のものを届けたいと言います。それは効率や量産よりも、「本心に納得できる一文字」を届けたいという強いこだわりの表れです。現在、提灯や木札を専門に手描きできる職人は全国的にも非常に少なく、北海道など遠方からもInstagramのDMを通じて依頼が寄せられています。口コミや紹介によって仕事が広がっている背景には、こうした姿勢への信頼があります。

技と心の文化を次の世代に

地域の祭りや神社へ奉納する提灯、店の顔となる看板。その文字は何年何十年と人の記憶に残ります。手描き屋職人のともさんが、文字を描くことで文化を守り、次の世代へと受け渡しています。その技と心を継ぐ後継者との出会いも、静かに待ち続けています。今回の取材でそんな姿をこれからも私たち市民が応援し、若い人たちにも伝えていきたいと感じました。

取材
HAL



手描き屋とも
住所:古河市女沼334-2
営業時間:8:30~19:00
☎0280-92-3233
定休日:不定休
mail:tegakiya.tomo7132@gmail.com



Instagram @ tegakiya_tomo